

## 今と七百年前のアンコール 真臘風土記を読みながら (一)

アンコール・ワットを身近に感じるようになったきっかけは、石澤義昭<sup>いしざわよしあき</sup>上智大学教授（現在、上智大学学長）との出会いである。それから二十年以上の歳月が過ぎた。その出会いから数年後、話しに聞いてきたアンコール・ワットを初めて訪れた。まだ悲惨<sup>ひさん</sup>な歴史の爪痕<sup>つめあと</sup>を身近に実感させられた。約十五年前のことである。

その時には自分自身が十回以上も行くことになるとは思ひもしなかった。当時はアンコール・ワットのある街、カンボジアのシエムリアップに行くには、タイのバンコックに行つて、そこからカンボジアの首都、プノンペンまで飛び、さらに中型のプロペラ機に乗り換えなければならなかった。乗り継ぎの時間上、バンコックの空港ホテルで一泊を強いられることが多かった。野原に平屋の掘っ立て小屋がポツツンと建っていた。それがシエムリアップ空港であった。

今は、滑走路は拡張・延長され、見違えるほど空港も立派になった。バンコックからジェット機の直行便が出ている。日本からも直行のチャーター便が出ており、格段に便利になっている。日本を発つて五〜七時間もすれば、シエムリアップ空港に立つようになっている。



七百年ぐらい前、中国の元朝使節団の一員としてカンボジア（真臘<sup>しんろう</sup>と呼ばれていた）を訪れて「真臘風土記<sup>しんろうふうどき</sup>」という見聞録<sup>けんぶんろく</sup>を残した周達観<sup>しゅうたつかん</sup>の場合は、中国の港を発つて辿り着くのに約四ヶ月も掛かっている。高度約一万五千キロから眺めた地球の様子<sup>しやうし</sup>は、約五十億年という地球の歴史からすれば、千年、二千年ぐらい昔もほとんど同じだったのにもかかわらずだ。

「真臘風土記」の日本語対訳本としては「考証 真臘風土記」（三宅一郎・中村哲夫著 同朋舎一九八〇年）と「真臘風土記」（和田久徳訳注・東洋文庫 平凡社一九八九年・一九九八年）が有名である。いずれも絶版だけれど、運良く僕は二冊とも入手できた。

読んでみたら、まさに見聞録である。城郭都市、住居、衣装、役人、宗教、住民、出産、乙女、奴隷、言語、文字、暦、病気、死亡、耕作、産物、商売、草木、野菜、獣、魚、車、舟、村落、軍隊など、約一年間の滞在中に周達観が好奇心に駆られて貪欲に見聞きしたことが約四十項目に分けて書かれていた。本屋の旅行関連の書棚を賑わしている「地球の歩き方」のノリである。

そしてカンボジアに関する学術的な著書や論文に「真臘風土記」は頻繁に引用されているけれど、その内容はごく一部だということが分かった。まさに「見聞録」であって、学術的には真偽が問われることが少なくないのだから、それは無理のないことだと思った。

しかし、僕は学者ではない。そこで前述の二冊の本を基礎にし、それに現在入手できる東南アジア・カンボジアの各種資料を参照しながら、様々な画像情報も加え、周達観の「真臘風土記」の世界と現在の世界とを時空を超えて自由に往来し、カンボジア、アンコール・ワットなどをもっと身近なものにしたいと思った。それは、まさに周達観のノリであり、いろいろ間違いや問題が多いものになると思うけれど、ご容赦願いたい。

## 周達観について

周達観は元朝の使節団の一員として一二九六年二月に中国の浙江省温州市の港から出帆し、七月にカンボジアに到着、約一年間の滞在の後、一二九七年六月に帰途につき、八月に中国に戻ったようで、それから二年以内（一二九七〜一三〇〇年）に「真臘風土記」を書いたものと推定されている。

日本の鎌倉時代（一二九二〜一三三三年）の出来事である。この約二〇年前に日本は元軍の攻撃を経験していた。いわゆる元寇である。「文永の役」（一二七四年）と「弘安の役」（一二八一年）である。



一方、この「文永の役」の頃、イタリアのベネチア商人のマルコ・ポーロがシルクロード経由で元朝の主都、大都（現在の北京）に入り、それから一七年間、元朝に仕えた。一九九二年海路で帰国の途に着き、インドネシア、インドなど経由してイランに着き、ベネチアに一二九五年に戻り、そして「東方見聞録」を一九九九年に完成させている。ヨーロッパはイタリア・ルネサ

ンスの始まる五十年ほど前の、いわゆる中世暗黒時代で、ローマ・カトリック教会が絶大な権限を持っていた時代であった。

その頃、元朝は、概略、右図の範囲のような人種・宗教を超えた巨大な帝国を建設していた。産業も文化も科学技術も大きく発展した。「真臘風土記」と「東方見聞録」がほとんど同時期に完成されたこと、そしてその著者がいずれも元朝に絡んでいることも、こうした背景を考えれば、不思議なことではない。

しかし、マルコ・ポーロと違って、周達観自身については、現在の中国浙江省（寧波あるいは温州）出身であること以外、その生い立ちも経歴も家系も良く分かってはいない。元朝の使節団の一員に任命されたというが、「真臘風土記」の巻頭で自分自

身を「逸民」(官職に就かず暮らす民間人)と称していることから、まず役人ではなかったと考えられている。また「真臘風土記」以外の著作が見当たらないことから学者ではなく、といって書かれている内容から普通の商人とも思われれない。探求心が旺盛な通訳ではなかったろうかと推測されている。

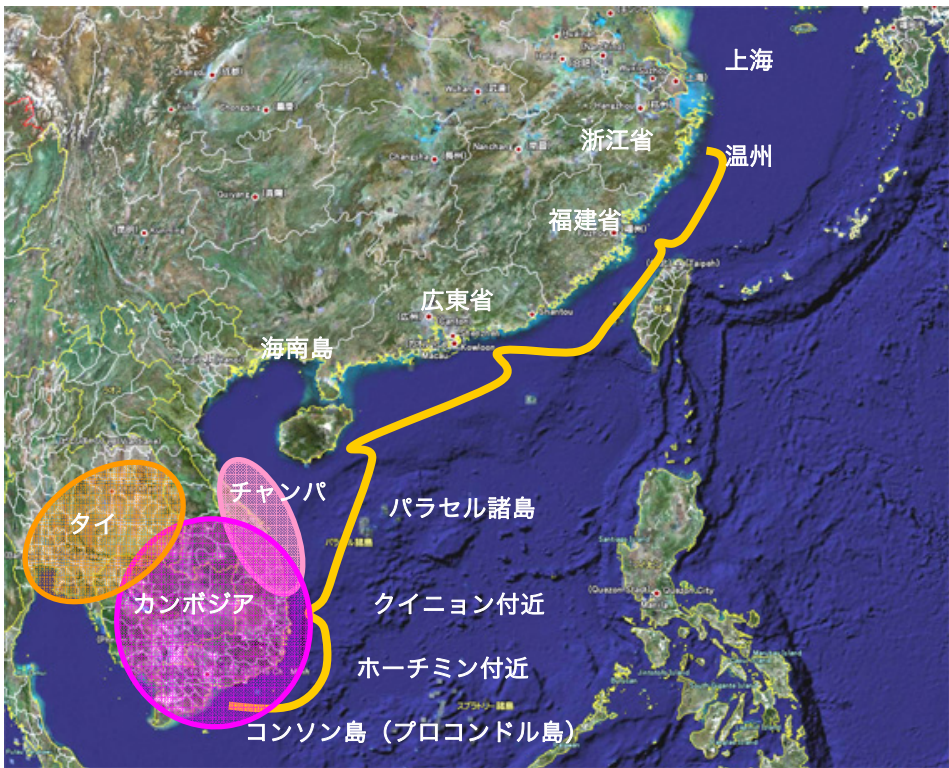
浙江省は、温暖な気候、肥沃な土壌、天然の良港に恵まれ、古くから南方との交易が盛んであった。そこで生まれ育った周達観は南方諸国について多くの知識を持ち、それらの言語の素養もあって、使節団の一員に選ばれたと考えられている。

## (一) 序文

周達観は「真臘風土記」を次のように始めている。

中国で真臘あるいは占臘と呼んでいる国は、カンボジアと自称している。

温州市の港より出帆し、福建省、広東省そして海南島のいくつもの港を経由し、南シナ海のパラセル諸島を通過し、ベトナム中部の沖合を南下し、ベトナム中部を拠点とする王国、チャンパの港、現在のクイニョン近郊に着いた。しかし、そこからカンボジアとの国境にある港、現在のホーチミン近郊まで行くためには、さらに追い風でも半月ほど掛かる。



この周達観のチャンパとカンボジア国境の港までの海路を地図上で辿ると、概略、  
図のようになる。

余談だけれど、この海路の記述にパラセル諸島が出てきたのには驚かされた。日本では西沙諸島と言われてきたもので、人の居住は難しく、軍事的以外ではほとんど価値がないとされていたところけれど、「排他的経済水域」、とくに埋蔵石油・天然ガス資源との絡みで、中国とベトナムとの間でその帰属が、日本と中国との間の尖閣諸島と同じように話題を呼ぶようになってきている群島である。こうした帰属問題では、客観的証拠として歴史的な記述文書の有無がよく議論される。ベトナム側の文献についての知識はないけれど、これを読んで、これはベトナムに不利な材料になるように思えた。

周達観はさらに南下し、メコン・デルタ地帯に入り、その河口の一つからメコン川を遡上してアンコールに向かった。船は五十人乗りぐらいの帆船、いわゆるジャンク船で、途中で小舟に乗り換えた。そんな過程が次のように書かれている。



このカンボジアとの国境の港、現在のホーチミン近郊から南西に進み、コンソン島の北の海を通過してメコン・デルタに数十ある河口の一つ、ミトに入った。それ以外は浅いので大きい船は入れない。周囲一面は黄色の砂地と群生する葦で、遠くに背の高い籐の古木が見えるだけで、どこに居るのか把握することが難しく、船頭さえも港を探すのに苦労する。



西北にメコン川を遡ると、増水のため川の流れが逆になるところがあり、そこからは流れに乗って進んだ。河口から数えて半月ほどでコンポン・チュナンに着いた。そこで小舟に乗り換えて約十日、ポーサットという村を通過し、大きなトンレ・サップ湖を渡り、ようやくシエムリアップ川の河口近くの船着き場についた。そこから目指す城郭に囲まれた都までは約三十キロの距離である。

数年前、周達観が遡ったメコン川の下流のメコン・デルタ地帯に行った。ベトナムの工業化の状況を調査するため、ホーチミン周辺のプラスチック製品、機械部品、農業機械などの製造工場や工業団地を調査するために出かけた時のことである。すでに大型の化学繊維工場やプラスチック工場など原材料工場が中国資本で次々と建設され始めているのが印象的だった。

現地視察を終えた後、半日を使ってベトナム戦争（一九六〇年～一九七五年）で、ベトナムがゲリラ活動の拠点としたジヤングルに縦横に張り巡らされた地下壕を見学に行った。完全に観光地になっていた。地下壕の入口はアメリカ人が入れないように狭く作られているという説明を聞いて、実際に入れるかどうか、若いフランス人、ドイツ人、アメリカ人などの観光客が笑い興じながら挑戦する姿を、異次元の出来事のように眺めたことを鮮明に覚えている。

反戦・反米の学生運動とPPM（ピーター・ポール・アンド・マリィ）やジェーン・バエズなどのフォークソングで若い頃を過ごしたからだ。その後、映画「地獄の黙示録」に出てくる水陸両用のプロペラ推進のパトロールボートが疾走したメコン・デルタ地帯に行った。

無数の狭い支流は、まさに「地獄の黙示録」に出てくる世界である。三十、四十年前に米軍とベトナム軍とが死闘を演じた舞台である。本流は周達観が七百年ほど前に遡った際に、「真臘風土記」で語っている通りの広大で単調で目標を定めることが難しい世界である。その同じ場所を身の危険を案ずることもなく快適に遊覧して眺めている。僕は奇妙な感覚に全身を包まれて動けなかった。

話を元に戻す。周達観は続いて、元朝前の宗時代、十三世紀に福建省の貿易関係の役人だった人物によって書かれた「諸蕃志」を引用し、当時のカンボジアの地理的位置や広さなどについて簡単に触れている。「諸蕃志」は十八世紀末まで写本として伝えられ、かなり広く普及していた本だそうである。しかし、「諸蕃志」のカンボジアに関する記述には、その書名——「蛮人たちの記述」という意味にも現れているように思うのだけれど、曖昧で不正確なことが少なくない。それを周達観は引用しているのだけれど、その引用も間違っているという。ちよつと知識をひけらかそうとしたのかもしれない。

「諸蕃志」を調べると、カンボジアは、三方はチャンパ、タイなどの国々と接し、一方は海に開かれており、古くから中国と通商している。

しかし、そこで書かれている内容は煎じ詰めれば、この程度である。周達観が訪れる以前からカンボジアと中国との間に通商関係があったという記述ぐらいにしか興味を惹かれない。続く元朝とカンボジアなどの関係についての記述も似たようなものである。

元朝は天命を授かり、周囲のすべての諸国をその傘下に納めた。チャンパにも地方政府が置かれた。カンボジアに二人が派遣されたことがあったけれど、捕らえられて戻らなかった。

それで周達観しゅうたつかんが加わったカンボジア使節団が派遣されることになったという文脈あいまいになっているのだけれど、この記述も曖昧で不正確だという。十年以上もの間の出来事がわずかに二行あまりで書かれている。

元王朝の公式歴史書、正史「元史」（全二百十巻）などによれば、元朝がチャンパ地方政府を設置したのは、周達観しゅうたつかんが加わった使節団がカンボジアに出発する十五年前の一二八一年である。翌年の一二八二年、派遣した使節がチャンパに捕らえられる事件が起こり、それを口実に元朝は出兵し、一二八四年チャンパを降伏させた。チャンパを侵攻した遠征隊の一部はカンボジアに攻め入り、カンボジアも降伏させた。一二八五年、チャンパとカンボジアは元朝に使節を送り、貢ぎ物みつを行った。以来、十年以上、元朝とカンボジアとの間でトラブルが起こった記録はない。だから周達観しゅうたつかんは、派遣された元朝の使節がカンボジアで捕らえられたと書いているが、それはチャンパの間違まちがいではないかという。

一方、「元史」には、そもそも周達観しゅうたつかんが加わったカンボジア使節団に関する記述なくらいだから、ひよつとすると、チャンパとは別に本来に元朝の使節がカンボジアで捕らえられる事件があったのかも知れないという意見もある。要するにハッキリしていない。ハッキリしていることは、昔から中国はベトナムやカンボジアへの侵攻を繰り返してきたということである。そうした歴史が存在することを知らないと、現在の東南アジアの状況も正しく理解することができないと改めて思った。

一二九五年六月、元朝の成宗はカンボジアを従属させるために使節団を派遣することを決定し、それに周達観しゅうたつかんも同行させられることになった。一二九六年二月、浙江省せつしゅうしやう寧波市ねいはしを離れ、二月二十日に浙江省せつしゅうしやう温州市の港より出帆し、三月十五日にチャンパに着いた。しかし、そこからは季節風が逆風になったこともあり、カンボジアに着いた時には七月にもなっていた。そして、ついにカンボジアを家来として服従させて、一二九七年六月、帰国の途について、八月十二日に浙江省せつしゅうしやう寧波市に戻った。カンボ

ジアの風土や国家のすべてを詳細に知ることはできなかったけれど、その概要は知ることができた。

しゅうたつかん  
周達観は (一) 序文をこのように書いて終わり、続いて彼の約一年間のカンボジア滞在中に見聞きしたことを (二) じょうかくとし 城郭都市、以下順次書き進めている。

(つづく)

(二〇〇七年夏 伴 友貴)